

# きゃつとtimes

猫家の愉快な仲間たち

## 浦安三社例大祭

豊受神社神輿渡御

6月14日(金)宵宮

15日(土)高出〜御輿渡御

16日(日)御輿渡御〜宮入り



2024年(令和6年)1月1日

発行 / きゃつとタイムス編集委員会

# いよいよ開催 8年ぶりの浦安三社例大祭

熱い思いで元町が煮えかえる!!準備はいいか!!待ちに待った3日間がやってくるぞ

コロナ禍で開催延期が続いていた「浦安三社例大祭」が、2024年6月に8年ぶりに開催される。大小80基ちかくの神輿と山車が街に練り出す、浦安最大の祭だ。浦安の神輿といえば、「マイダ!マイダ!」の独特なかけ声。威勢の良いかけ声が街中に響く3日間がいよいよやってくる。

例大祭のルーツは、明治時代にさかのぼる。明治22(1889)年に猫実村、堀江村、当代島村の3村が合併し、浦安村が誕生する。豊受(猫実)、清瀧(堀江)、稲荷(当代島)の三社はそれぞれの村の鎮守様だ。祭禮に神輿が登場したのは大正時代という。祭禮の時期は10月だったが、大正末期から4年に1度、6月に三神社で行われるようになった。宮神輿は清瀧と豊受到各2基、稲荷に1基あり、それぞれの地域を練り歩く。

元々は血気盛んな漁師町だった浦安。祭りに熱中するあまりに神輿の担ぎ手同士で喧嘩をするため「暴れ神輿」などと呼ばれていた。1961年には民家や交番に神輿が突っ込むという事件が起きる。警察から許可が下りず、74年まで13年間、中断を余儀なくされた期間がある。かつての祭の姿を伝える歴史のコマだ。

時は移り変わり、不可能とされていた三社の宮神輿5基そろっての渡御が実現する。2016年6月4日、市役所新庁舎の完成を祝うため、新庁舎周辺を合同渡御したのだ。宮神輿が各地域の外に出ることは異例だが、「浦安のために祝いたい」という思いで集結した。時代の変化と未来を感じさせる出来事だった。そしてコロナ禍を経て、また新たな例大祭の歴史が刻まれていく。



2020年4月に、清瀧・豊受・稲荷の三神社の宮司に就任した。先代の宮司、家原國彦さん(享年72歳)の急逝を受けてのことだった。本来なら、約2カ月後に浦安三社例大祭が開催される予定だった。当時は新型コロナの感染が拡大し、直後に千葉県などに緊急事態宣言が発令される。延期を重ね、宮司として初めて迎える例大祭だ。「先代の宮司が築いてきたものをしっかり守っていききたい」と思いを語る。

黒川さんは生後まもなくから、埋め立て造成されたばかりの舞浜地区で育った。両親は栃木県出身。実家は地元の神社で代々神職を

務めていたが、父は都内でサラリーマンをしていた。将来について考えていると、神職が頭に浮かんだ。会社員生活は向いていないとの思いと、実家の関係で神社は身近な存在だった。神職資格が取得できる国学院大学への進学を見据え、国学院高校に進学した。

高校2年のとき、将来役に立つと思ひ、雅楽を学ぶことにした。ちょうど当時、01年に宮司に就任したばかりの家原宮司が神社で雅楽教室を開いていた。黒川さんは月2回の教室で龍笛を学びながら、ご祈禱の手伝いや境内の掃除などもするようになる。

大学卒業後は三神社に勤めるという選択肢もあった。一方で「大きな神社で働いてみたい」との思いもあり、07年4月、明治神宮に就職する。大きな場所で働くやりがいもあったが、明治神宮は氏子がない「崇敬神社」で、地

家原宮司を「行動力があって、出かけたらず帰ってこないような人」だったと振り返る。猪突猛進型で、氏子の一人は「三神社を、あるべき姿に変えた人」と表現する。初詣や大祓式など地域の人々が参加する年中行事に熱心に取り組み、社務所でのお守りの頒布などにも力を入れ、神社にもっと人が集まるようにした。

黒川さんは自身の性格を「あまり冒険はしない、慎重なタイプ」と自己分析する。いつか自分が宮司になるとは考えていなかったが、家原宮司が20年1月23日、膵臓がんで逝去する。発覚から1年足らずの訃報だった。後任は、氏子の総意で黒川さんに任される。生前、病床の家原宮司から「自分に万が一のことがあっても、お祭りは絶対にやってくれ」と託されていた。それが、ようやく実現する。

例大祭での宮司の最大の任務は、前日夜に開かれる宵宮での御霊入れだ。神社に集まった神輿に、神様の御霊を移す。その後は祭りが無事に終わることを願い、渡御を見守る。「祭は浦安の人たちにとってとても大事なものの。氏子さんの神社、氏子さんの祭ですから」と話す。

自身が目指す「宮司像」はまだ模索中という。「今は色々な方たちから話を聞きながら勉強中です」とはにかんだ。

取材執筆: 泉澤多美子

## ひと 宮司 黒川彰吾 (39)

受け継いだもの 守っていききたい

域とのつながりも薄い。そんな環境が自分には合わなかったのか、体調を崩して3カ月で辞職する。自宅で休んでいたころ、家原宮司から「元気にやっているのか」と電話がかかってきた。再び手伝いをするようになり、同年7月から三神社に勤め始めた。